Bulletin d'Études de Linguistique Française

48

(2014)

TABLE DES MATIÈRES

Articles

Essai de reconsidération des verbes psychologiques et sensoriels en français
—Qu'est-ce qu'un sujet psychologique et sensoriel ? ..... KAWAKAMI Carine 1

La construction 〈voilà +SN+proposition relative〉
—scène antérieure et scénario schématisé ..... TSUDA Yoko 19

L'imparfait et son domaine d'interprétation
—rétrécissement du champ visuel ..... TOGO Yuji 37

L'énoncé 〈*Ça* + verbe〉 et le mode de cognition ..... HASUKI Yoshitaka 57

Discussions

En attendant ..... WATANABE Junya 77

Comptes rendus 85

Foire aux questions

Voix de l'auteur et voix sur les lieux ..... ABE Hiroshi 97

Je ne descends pas, mais je descendrai : les formes verbales référant à l'avenir
..... OGUMA Kazuro 102

Le numéral précédé ou non de l'article dans les titres
—*Les Trois Sœurs* vs. *Quatre sœurs* ..... ODA Ryo 107

Le plus-que-parfait pour parler de l'avenir ..... SODA Yusuke 113

Erreur ou faute ? ..... NAKAO Kazumi 117

Ne dites pas : « *Il est un...* », mais dites : « *C'est un...* » ..... NISHIMURA Makio 121

Journées d'études

Pour une critique de la linguistique cognitive 125

La pluralité de la traduction 134

Colloques internationaux 140

Résumés des séances 146

Bibliographie 153

Mémoires et thèses 155

Appel à projets 156

Liste des nouveaux membres 157

Statuts et règlements de la Société Japonaise de Linguistique Française 158

Droits d'auteur 159

Société Japonaise
de Linguistique Française
c/o Université Aoyama Gakuin
4-4-25 Shibuya, Shibuya-ku, Tokyo

ISSN 0286-8601

フランス語学研究

第 48 号

論文

フランス語の心理・感覚動詞研究 —心理・感覚の主体とは何か？… 川上夏林 1

voilà+名詞句+関係節）構文をめぐって
—当行場面とスキーマ化されたシナリオ …… 津田洋子 19

[illegible]を支える解釈領域 —視野狭窄の半過去を中心に …… 東郷雄二 37

[illegible]を出発とする発話と認知モード …… 谷木仁孝 57

[illegible]

[illegible]について …… 渡邊淳也 77

[illegible] …… 85

[illegible]

[illegible]の声 …… 阿部 宏 97

[illegible] *Je ne descends pas mais je descendrai* : 未来を表す動詞形 …… 小熊和郎 102

[illegible]に現れる数詞と冠詞の関係
—*Les Trois Sœurs*と*Quatre sœurs*— …… 小田 涼 107

[illegible]なのに大過去？ …… 曽我祐典 113

[illegible] …… 中尾和美 117

[illegible] « *Il est un...* », mais dites : « *C'est un...* » …… 西村牧夫 121

[illegible]

[illegible]の可能 …… 125

[illegible]の多面性 …… 134

[illegible] …… 140

[illegible] …… 146

[illegible] …… 153

[illegible] …… 155

[illegible] …… 156

[illegible] …… 157

[illegible] …… 158

[illegible] …… 159

2014

日本フランス語学会

詞 + 名詞〉のパターンも見られることをどう説明するかが問題でしょう.

A：確かにそれが難問だね．大まかに言ってしまえば，君が提案した「a. 対話に参加している Je-Tu, Nous-Vous」と「b. 対話の外にいる人・物」という2つの枠に収まらない場合に〈Il (Elle) est + 冠詞 + 名詞〉を使うようだ．例えば，本の裏表紙にある作者紹介で，Il (Elle) est l'auteur de... とあれば，対話がない（＝Je-Tu, Nous-Vous がない）ことが前提で，話題になる可能性は「その人＝Il (Elle)」しかないということになる．また，Il a réalisé qu'*il était* un vieillard. だったら，主節の Il と従属節中の il は同一人物（自分自身）なのに対して，Il m'a dit que *c'était* un excellent cuisinier. だったら，c' は別の人物（＝対話の外にいる人）になる．

Q：なるほど ... 他にもいろいろ問題が出てきそうですね．それを次の研究テーマにしようと思います．いずれまたご意見をお聞かせください．

（西南学院大学）

シンポジウム報告

認知言語学の功罪
—「個別言語」と「言語」と「認知」のせめぎ合い—

日　時：2013年6月1日（土）10時 - 12時
会　場：国際基督教大学 本館304教室
パネリスト：
西村義樹 「英語学」
守田貴弘 「フランス語学」
河内一博 「シダーマ語学・クプサビニィ語学」
柚原一郎 理論言語学
企画・提題・司会：酒井智宏

パネリストへの宿題

酒　井　智　宏

次の対話を読んで後の問いに答えてください．

A：フランス語のこの言語現象には人間の認知が反映されているんだよ．

B：でも，英語にその現象はないですよね．ってことはフランス語を話す人と英語を話す人は認知が違うってことですか？

A：ヒトとしての認知は同じだけど，顕在化する認知パターンが違うってこと．言語に現れる認知パターンを研究するのが言語学者の仕事なんだ．

B：そうか．認知パターンが違うから外国語を学ぶのがこんなに大変なんですね．いまドイツ語の複数形が覚えられなくて困っているのですが，きっとドイツ語を話す人にとっては，たとえば猫が複数集まる（eine Katze → Katzen）のと，鳥が複数集まる（ein Vogel → Vögel）のとでは，複数性の認知パターンが違うってことなんですね．英語だとどっちも s をつける（a cat → cats, a bird → birds）だけなので，英語を話す人はどっちの場合も同じ認知パターンだと思いますが，フランス語は複数形

にしても名詞の発音が変わらないので，あ，でも冠詞は変わるから…まあいいや．シダーマ語の複数形を調べたら，シダーマ語を話している人たちの認知パターンが分かりますよね．言語を調べただけで認知パターンまで分かるなんて，すごいなあ．でも，猫が複数いるのと鳥が複数いるのとで，いったい何が違うんだろう？想像もできないや．

A：そんな細かい形態変化にまで認知パターンが反映されているとはかぎらないよ．

B：え？認知言語学の授業で「形式が異なれば意味も異なる」って習いましたけど．じゃあ，先生が研究されている言語現象にだって，フランス語を話している人たちの認知パターンが反映されているとはかぎらないですよね．

A：人間の普遍的な認知というものがあって，それがある特定の形をとってフランス語の表現に現れているということなんだ．私はそういう表現を研究しているのさ．

B：その人間の普遍的な認知というのはどうやったら分かるんですか？まさかフランス語や英語やシダーマ語 etc. の表現から共通部分を取り出して，なんて言わないでくださいよ．そうやって取り出された「認知」が言語に反映されているのは当たり前じゃないですか．本物のブーメラン遊びは楽しいかもしれませんけど．

A：認知科学や脳科学といった学問があるから，それらを勉強してみるといいよ．

B：じゃあ，フランス語なんか経由しないで，いきなりそれらの学問を研究したほうが簡単に認知パターンの可能性を調べられますよね．なんでわざわざ回り道するんですか？

A：われわれはフランス語学者だから，フランス語そのものを見ないといけないんだ．

〈西村先生，守田さん，河内さんへの宿題〉

(1)　当該言語特有の現象を一つ，当該言語特有の現象でない現象を一つ取りあげ，そのそれぞれについて「英語学／フランス語学／シダーマ・クプサビニィ語学」とは別に「認知言語学」を参照することではじめて見えてくることを述べてください．

(2)　当該言語特有の現象の分析に関して，「認知言語学の説明は極端な言語相対論（＝X語話者とY語話者では世界認識が異なる）を帰結してしまうのではないか」という疑問に答えてください．

(3)　当該言語特有の現象でない現象の分析に関して，X語特有でない現象の分析を「X語の研究」と呼ぶことができるかどうかを述べてください．（それは「言語の研究」「認知の研究」とは言えても，「X語の研究」とは言えないのではないか？「認知言語学に基づくX語の研究」とは何をすることなのか？）

＜柚原さんへの宿題＞

認知言語学一般，および，西村先生，守田さん，河内さんの宿題（1）～（3）に対する回答を批判してください．

（早稲田大学）

「英語学者」が認知言語学を研究するわけ

西　村　義　樹

宿題1：英語特有の現象としてThis key opens the doorのような道具主語の使役構文が挙げられる．結果事象を意図的に引き起こした人がいて，その人を主語にした使役構文のプロトタイプを使って言い表すこともできるのに，あえて道具の方を主語にしている，という点がこの構文の特徴である．ここでは，プロトタイプ的な使役構文の主語になれる行為者が存在するにもかかわらず，それを差し置いて，道具があえて使役における行為の主体として捉えられている．行為者よりも行為者が使った道具の方が結果事象の実現のためにより大きく貢献していると感じられる場合に，道具が主語になりやすいと考えられる．この構文は，鍵という一部分に注目してその事態全体を表現するというメトニミー的性格と，鍵を行為主体であるかのように捉えるというメタファー的性格を併せもっている．道具主語構文に見られるこうした事態把握のあり方は，認知言語学を参照することではじめて見えてくると考えられる．

次に，英語特有でない現象として，語彙的使役構文で表される事態と迂言的使役構文で表される事態の傾向の違いを考えてみる．語彙的使役構文とは，「開ける」のような語彙的使役動詞を用いた構文のことで，迂言的使役構文とは，「読ませる」（動詞「読む」＋助動詞「せる」）のような複合的使役述語を用いた使役構文のことである．多くの言語において，「読む」「歩く」「食べる」「泣く」「笑う」といった行為に関しては語彙的な使役述語が成立しにくく，「読ませる」「歩

かせる」「食べさせる」「泣かせる」「笑わせる」のように迂言的な使役述語が用いられるという傾向が観察される．認知言語学の枠組みを用いると，この傾向は次のように説明することができる．「太郎が花子を歩かせる」においては，実際に歩いているのは花子であり，太郎が働きかけてはいるとはいえ，花子を行為主体とする気持ちが強いため，「(花子が) 歩く」という動詞が残される．こうして「歩く」に対する使役述語としては「歩かせる」(動詞「歩く」＋助動詞「せる」) という迂言的使役のみが可能となるのである．こうした説明は，言語の形式が意味によって動機づけられているとする認知言語学の立場に立ってはじめて可能となるものである．

宿題2：宿題1への回答として私が提示した分析に関するかぎり，極端な言語相対論を帰結してしまうことはない．メタファーやメトニミーを用いる能力は普遍的（すべての言語の使用者に共通）であり，その普遍性の基盤は何語を話す人間にも共通する（言語の知識に特化されない）心的なメカニズムにあると考えられる．この特定の場合に関しては，英語では使役構文のカテゴリーのメタファーとメトニミーに基づく拡張の慣習化が日本語より進んでいるが，そこから，英語話者の方が日本語話者よりもメタファーとメトニミー（およびその基盤にある心的メカニズム）を用いる能力が高い，という結論を導き出すことができないのは明らかである．

宿題3：宿題1への回答として私が提示した例に関するかぎり，語彙的使役構文と迂言的使役構文の区別は英語と日本語に特有の現象ではない（おそらく普遍的な現象である）ものの，それを「英語の研究」，「日本語の研究」と呼ぶことに何ら問題はない．他の多くの言語に見られる区別が英語と日本語にも見られることを指摘すること自体が有意義であり，その区別の基盤に，何語を話す人間にも共通する（言語の知識に特化されない）事態の捉え方の傾向があるならば，それは英語と日本語のこの現象の解明への貢献になる．（東京大学）

「フランス語学者」が認知言語学を研究するわけ

守　田　貴　弘

「クリティック上昇（clitic climbing）はフランス語に特有の現象と言えるかも

しれない．Je vais le voir や Jeanne veux le manger という語順になるところが，スペイン語では Lo voy a buscar（je le vais chercher に相当），イタリア語では Gianni lo vuole mangiare（Jeanne le veux manger に相当）のようになるから，フランス語特有と言っても良さそうだ．（ただ，18 世紀頃までは，フランス語もスペイン語・イタリア語式の語順だったのだが．）逆に，il s'est cassé le bras のように，se が所有者を表す所有者上昇（possessor raising）であればフランス語以外の言語にも幅広く見られるから，これも使えるな．何とかこれで宿題1の題材はそろった．あとは認知的な説明をどうするかだな．そこまで認知言語学をやっているつもりはないんだけどな．かといって，フランス語学者だと思っているわけでもないんだけど．最初からノックアウトされることが分かっている試合に出ていくというのは，なかなか勇気がいるな……（心の実況，終わり）」．

宿題1に答えて仮に認知的な説明をするならば，現代フランス語のクリティック上昇は，たとえば「見る」という行為と「見る対象」の意味的な結びつきを重視した概念化をしていて，スペイン語やイタリア語は行為の対象を重要視していると言えるかもしれない．しかし，このような説明をして「フランス語話者の認知を反映している」と言ってしまうと，ある時点でクリティックの位置が変化したことに対しても，どのような認識の変化が生じたのか説明する義務を負うことになる．そんなこと，できるわけがない．会えるものなら中世フランス語話者に会ってみたいが，それは叶わないし，会ってもその人の認知状態を知ることはできない．もしできるなら，現代フランス語話者の認知状態なんて手に取るように分かりそうなものだ．

つまり，宿題2には非常に答え辛い．「言語は人間の認識の反映」というテーゼをそのまま受け入れると，どうやっても極端な言語相対論を帰結することは避けられそうにない．では「認識の一部が反映されている．何が反映されているのかは，言語ごとに，文化ごとに違っている」という形に弱めてみてはどうだろうか．こうなると今度は，「わざわざ認識の反映などと言うメリットはどこにあるのか」という問いに答える必要が出てくるだろう．「所有のスキーマ」などを設定することで，所有者上昇と心性与格，迷惑受け身との関係も扱えるようになるなど，似た構文が違う意味をもたらす場合や同一事態に対して異なる言語化が行われるときには，やはり認知的な説明には便利な面もあると言いたいところだが，「それはフランス語の研究ではない」と言われても言い返すことはできないし，「認知的な説明」を押し通せているわけでもない．かくして，宿題3に対する回答もジレンマに陥る．

私の立場としては，同じ状況を目の前にしても，言語ごとに好まれる表現パ

ターンが異なることは確かだと考えている．しかし，それは「言語がそうなっている」からであり，決して認識の反映などではない．いや，言語相対性仮説の「弱い仮説」という意味で，言語が認識に影響を与える可能性はあるかもしれないと思いながら（決してその逆ではない），少なくとも「言語がこうなっている．なぜだか分からないけれど」という地点から出発している．「このような言語構造になっているのは，話者の捉え方がこうなっているからだ」などと無理に説明する必要はなく，ある言語を話すときには「注目」するポイントが変わるというだけで，認識の問題などではないと言っておきたい．そして，この範囲であれば穏健な認知言語学的な研究だと言えそうでもあるし，フランス語に特有ではない現象を扱っていても（語法研究以外で本当に特有の現象があるとは思えないけれど），フランス語の研究をしていると言ってもいいのではないかと思う．つまり，「類型論や認知言語学を参照したフランス語の研究」．わざわざ言う必要もなさそうだけれど．

（東洋大学）

「シダーマ語・クプサビニィ語学者」が認知言語学を研究するわけ

河　内　一　博

認知言語学は，言語（特に文法のパターン）が認知システム（以下で，言語を含まない）と関係があるという仮説（Croft & Cruse 2004: 1-4）をテストし，（関係があるのであれば）言語の現象が具体的にどのように特定の認知システムと関連しているか，言語と特定の認知システムの構造的類似性はあるか，言語とすべての認知システムに共通の原理的特徴はあるか等を調べる学問である．（認知言語学の研究は，言語が認知の反映であるという前提に基づいたものではないし，あってはならない．）したがって，特定の仮説や理論を支持するかどうかというのとは違って，認知言語学の研究に賛同するかどうかは，正しいか間違っているかという問題ではなく，言語と認知との関係について考えたいかどうかの問題である．

言語と認知の関係について実証されていることは限られていて，認知言語学の研究の大多数は，認知システムとの関連を示唆するような言語の現象を指摘するにとどまっている．しかし，証拠を提示するということまでするのは難しい学問分野である言語学において，一般的に，示唆的な発見にとどまらない研究は多くない．現段階では示唆的であるにとどまるような発見も，今後の認知のシステムの解明とともに実証される可能性がある．

認知についてだけでなく言語についてもわかっていないことは多くあり，特に研究が進んでいない言語の現象の記述は言語と認知との関係の解明に大きく貢献できる可能性がある．

私の宿題への回答は以下の通りである．

宿題1：クプサビニィ語（南ナイル，ウガンダ東部）特有と思われる現象として，クリティックを使用するかしないかによる共有と占有の区別を取り上げた．共有の標示の方が占有の標示よりも形態的に重いことを示した．当該言語特有でない現象としては，シダーマ語（ハイランド・イースト・クシ，エチオピア中南部）の外的所有者構文（external possessor construction，いわゆる所有者上昇（possessor raising））の一つとクプサビニィ語の外的所有者構文を扱った．どちらの言語のこの構文においても，所有者—被所有物という名詞句の順序を取らなければならないことを指摘した．これらの現象は，いずれも認知の営みを反映しているという仮説を立てることはできるが，シダーマ語とクプサビニィ語の話者たちの認知の仕組みについて調べていないし情報もないので，特に認知言語学を参照することで初めて見えてくると言えることはない．しかし，このことによって，認知言語学の是非を問うことはできない．（言語自体が認知システムであるというのなら別であるが，）認知言語学は，すべての言語現象が認知との関係によって説明できるという主張はしていない．

宿題2：言語と認知に関係があるということがわかったからといって，言語相対論が帰結されることにはならない．たいてい認知言語学で問題にしているのは，言語の認知への影響というよりも認知の言語への影響であり，どのように文法のパターンが認知によって制約されていて，認知を反映していると思われるどのような面において言語間での類似性が見られるかということに，認知言語学の関心はある．ただし，（認知言語学に限らず）多くの場合，違った言語の話者の認知についての比較研究をせずに，認知は普遍的であるという前提がなされているが，認知の普遍性は自明ではない．他方で，Talmy の「概念化（conceptualization）」，Langacker の「捉え方（construal）」，Slobin の「語りのための思考（thinking for speaking）」等で表されるような言語を使った事態の捉え方は，言語相対論で言語に影響を受けるとされる（言語を伴わない）思考方法とは異なるにも関わらず，しばしば言語相対論の検証という文脈で現れている．

宿題3：X語の現象でその言語特有でない現象の分析を「X語の研究」と呼ぶことができると思う．言語学とX語学の両方において論じることに何も問題はない．そもそも，X語学が言語学の下位範疇であるのなら，これらは二つの違った分野ではない．

すべての言語現象が認知によって制約を受けているということはないので，「認知言語学に基づくX語の研究」というのが適切であるとは思えない．「X語の現象YとX語の話者の認知システムの関係についての研究」あるいは「X語の話者の認知システムの特徴を反映していると思われるX語の現象Yの研究」という意味での「X語の現象Yについての認知言語学的研究」であれば理解できる．

（防衛大学校）

認知言語学（者）がこのままではいけないわけ

柚原一郎

宿題2と宿題3に関しては三氏ともに同様の回答（それぞれ「言語相対論にならない」「個別言語に特有な現象に限定される必要はない」）であるため，以下，認知言語学の一般的な主張に関してのみ述べる．

認知言語学の主張には賛同できる点も数多くあるが，自然言語には「偶然」あるいは「深い理由なく」決まっている現象も数多く存在する．母語としてであれ，外国語としてであれ，言語には意味や動機づけを考慮することなく，理由なくただ暗記して学ぶ側面が相当数存在しているのである．例えば英語の形式主語itに意味はなく，英語の「常に統語上の主語を必要とする」という要求を満たしているに過ぎない．言語の理由なく暗記して学ばざるを得ない側面を一般には「文法」と呼ぶわけだが，認知言語学ではこうした言語の純粋な形式面にどのように対処するのかという点が見えにくい．その見えにくさの一因は認知言語学が「統語論の自律性」を否定している点にあるように（少なくとも私には）思えるのだが，統語論の自律性とは「言語形式と意味は無関係」というような主張ではない．そうではなく「両者は密接に結びついているが，それぞれは分けて考えることができる」という研究方針（＝仮説）のことで，分析対象をいくつもの異なった次元（言語学であれば，音韻，形態，統語，意味など）に還元して考えるという研究姿勢は決して言語学に特有なものでもない．理論言語学者として認知言語学の文献を紐解き，まず不思議に思うことは，「もし言語の形式面が自律した体系でないとするなら，偶然決まっている言語形式，あるいは虚辞のitのように文型や音調を整えるためだけの語や形態素，さらには世界の言語の形式の多様性に，認知言語学者はいったいどのような説明を与えうるのだろうか？」という点である．（認知言語学の教科書では，理論言語学の常識を否定し，虚辞のitにも実は「意味」があるというような「説明」も行われているようであるが，とても成功しているとは思えない．）

おそらくは「統語中心主義（syntactocentrism）」として特徴づけられるチョムスキー派生成文法理論への強い反動からだと推測するが，認知言語学の分析は，言語形式の立脚基盤（＝意味的基盤）を探求したものが多いという印象がある．その中にはもちろん「啓蒙された」と感じる分析も存在するが，言語学者でなくとも気づくような観察や指摘が多く，また与えられた認知言語学的説明が，しばしば実証不可能なレベルに留まっており，他の枠組みの研究者が検証できるレベルに至っていない点は残念である．（「～という気持ちが強い時には～という形式が使われる」のような後付けの説明に対しては，「確かにそうかもしれない」と言う以外にない．）「人間の認知の営み（意味）と言語（形式）は有契的なつながりを持っている」というような仮説を実証するのであれば，その人間の認知能力（あるいは概念的意味）が，現在の英語，フランス語，シダーマ語，クプサビニィ語文法のどこで作用するのか，その条件を公式化（formalize）しない限りは分析にはならない．また言語話者間で意味の経験的基盤にほとんど差がないことを考えると，真理条件的に等価な表現が言語間で異なる形式によって表現されるからといって，それを言語話者の認知の違いとか概念構造の違いなどに求めるのは論理的に飛躍している．また，認知言語学の入門書では，1960年代に「深層構造」を「意味構造」だと考えた生成意味論者たちが認知言語学の出発点であるというような説明が与えられていることもあるが，生成意味論者たちは意味構造が普遍的であると考えた点において，認知言語学（例えばラネカー）とは見解を異にするということに注意する必要がある．

最後に，文法を記号体系として捉える言語観は認知言語学に特有のものではなく，LFG（語彙機能文法），GPSG（一般化句構造文法），HPSG（主辞駆動句構造文法），RRG（役割指示文法）といった生成文法諸理論もそうした言語観を共有しているという点にも注意を促したい．これらの理論の枠組みによる分析も考慮したうえで，認知言語学的・認知意味論的分析の優位性を示すことこそが認知言語学者の最も大切な仕事であり，他の理論を無視したり，むやみに対立を煽ったりすることは全くの不毛であることは強く指摘しておきたい．

（首都大学東京）